

令和6年度組織目標 知事協議概要

部 局 名	文化スポーツ部
日 時	令和6年(2024年)4月17日(水) 15:00~15:45
場 所	特別会議室
出 席 者	知事、江島副知事、大杉副知事、知事公室長、総合企画部長、総務部長、総務部管理監 部長、次長、国スポ・障スポ大会局長、文化芸術振興課長、美の魅力発信推進室長、文化財保護課長、文化財活用推進・新文化館開設準備室長、彦根城世界遺産登録推進室長、スポーツ課長、交流推進室長、国スポ・障スポ大会局総務企画室長、広報・県民運動室長、競技運営室長、施設調整室長、競技力向上対策室長

発言者	発言概要
総務部長	国スポ・障スポ大会の開催にあたり、バスや宿の確保は大変だと思う。できる限り県内の宿を使うとしても、県内だけでは難しく隣接府県の協力が必要となるが、京都府・大阪府はなかなか頼れない。どのように確保していくのか。
施設調整室長	昨年度から、京都・奈良・三重・岐阜に協力依頼を行っている。京都などで確保できない場合、更にもう少し範囲を広げることも検討していきたい。
総務部長	国スポ・障スポ大会の開催3巡目に向け、見直しの議論が始まっている。今まさに準備しており、来年開催する滋賀県だからこそ言えることがたくさんあると思うので、強く物を申してほしい。
国スポ・障スポ大会局長	直前に経験している県だからこそ分かるもの、経験したことで初めて分かったもの等、いろいろ見えてきている。 一例を挙げると、国スポだと11日間、障スポだと3日間の期間に、全国から全ての競技を一度に受けるといふことに、苦しんでいる部分がある。一方でそのような機会だからできることもあるので、メリット・デメリット含めて、国に発信していきたい。
知事公室長	国スポ・障スポの機運醸成について、例えば、各市町の集落・自治会等から盛り上げていくのも大きいと思う。前回の国体では、集落を巻き込むことで県民の盛り上がりも出てきたし、全体感も出てきた。あと1年となったが、どのように取り組んでいるのか。
広報・県民運動室長	去年秋から、市町と機運醸成のワーキングを実施しており、市町にも力を入れていただいているところ。意見として出していきたい。
総合企画部長	国体を目指して強化してきて、終わったあと、どこを目指せばよいかわからず、燃え尽きみたいになっているところがあると聞いた。その先を見て、強化を進める必要があるのではないかと。
競技力向上対策室長	人を残すことに軸足を置いていきたいと思っている。天皇杯獲得は目標であって、国スポの目的は、人や強化ノウハウを滋賀に残して定着させることだと思っている。 優秀な選手が来ることで各競技団体が変わっている。トップの選手と一緒にいるだけで、周りの選手の雰囲気もどんどん変わっている。あとはその人たちに滋賀に残ってもらえるような手立てを考える。今年から、セカンドキャリアを検討する窓口担当を置いた。トップの競技力を追求するだけでなく、将来、普及等に関わってもらえるような人材を残すことも意識してやりたい。
知事	今、言及いただいたセカンドキャリアは、大事なレガシーになると思う。
総合企画部長	国スポ・障スポ大会で、大勢の人が全国から来られて、味わいとか、楽しみとか、お土産を買って帰ろうと思ったときに、何も無いというのはすごくもったいない。おもてなしのところ。こういうお土産物がありませんか、せめて何か紹介できればと思う。
国スポ・障スポ大会局長	大会では、おもてなし広場のような、お土産を買う場所は用意するが、それだけでは十分ではないと思う。お土産を買う、観光する、美味しいものを食べるとかいうのを来られる方は期待しておられるので、レガシー本部で、横繋ぎで、しっかりとできればと思う。
総合企画部長	文化財の活用ということで、有名な観光地に行った時、非常に価値のある文化財が消費されているように感じた。滋賀県の場合、文化財は生活の中に生きていて、守り続けている方がおられる。無理やり公開するとか、安売りするようなことがあってはいけない。活用は必要だが、傾合いが難しいと感じている。
文化財保護課長	文化財の活用、公開については、文化財の場所や規模等によっても変わると思う。どうするのが一番適当か、いろいろなパターンがあり難しいが、重要な視点ではあると思う。
大杉副知事	彦根城の価値の周知というと、若干、上から目線に聞こえてしまう。日本の城の新たな価値発信に貢献するというスタンスが伝わると、周囲の巻き込みとか、そういうことにも繋がると思うので、貢献という姿勢も出してほしい。
彦根城世界遺産登録推進室長	まずは仲間を作っていくということ、価値の共通する城に声をかけていくという話をしている。仕掛けづくりをした上で仲間を広げ、学術上の価値を一般に広げていくという戦略を持って取り組んでいきたい。
大杉副知事	文化財のセミナーについては毎回盛況だと思うが、一方で、固定客や常連向けになっていないか、時々チェックをしながら、進めてほしい。
文化財活用推進・新文化館開設準備室長	4月以降、活用や機運醸成がどれだけできているのか、うまく押し量れる指標が無いか考えている。まだ、ふさわしい指標が見つけ出せていないが、指標を考える中で、いかに理解や興味を持たれる方を増やしていけるか考えていきたい。
大杉副知事	活用等のバランスは非常に難しいが、サステナブルツーリズムは、まさにうまくバランスとって実現していくというもの。サステナブルツーリズムという、既存の価値をむしろ高めるためのツーリズムという考え方で推進していただきたい。
大杉副知事	国スポ・障スポについて、体制の脆弱な各競技団体の事務局に、多額の補助金の交付がなされることで問題が生じることがある。場合によっては会計管理局等の協力も得ながら、しっかり目配りしてほしい。
競技力向上対策室長	競技団体の経理の関係では、会計課とも話をしながら進めている。併せて競技団体に公金の取扱を徹底するよう周知をしている。 しっかりウォッチしていかないといけないし、大会が終わった後、競技団体のガバナンスが一定整理され、整ったというところも、レガシーとして残せるよう目指していきたい。

知事	ぜひガバナンスをしっかりと。チェック体制を。
競技力向上対策室長	競技団体そのものの、ガバナンスというところも、しっかりしていこうと思う。
大杉副知事	この前の「アートにどぼん！」は、子どもたち向けのイベントという意味でも、美術館が地域に飛び出していくという意味でも、北部振興という意味でも、とても良いイベントであった。継続的に実施するため、美術館側で課題があれば教えてほしい。
美の魅力発信推進室長	課題というより反省点として、もっと地元自治体との連携のもとで情報発信ができたのではと思っている。 各開催会場の担当者の方には、新聞記事にさせていただく等、熱心にご協力いただきありがたかった。一方で、知事への手紙において、他の会場でもやってほしかったという声もいただいております、開催地については、規模も踏まえて考えていきたい。
江島副知事	文化プログラム参加児童数2万6000人が目標という数字があったが、スポーツもスポーツプログラムの参加者数を指標で取って、大会が終わった後、どうなっていくかを見ていくのも大切だと思う。子どもにとって、大会がレガシーとして引き継がれていく、そのための取り組みが必要だと思う。ぜひ、スポーツプログラム参加児童数などの目標を作り、それをフォローしていくことも考えてほしい。
スポーツ課長	スポーツイベントをやっている当課でも、そういった視点をもってやっていきたい。 それと合わせて、スポーツに興味を持ってもらえるよう、今年は、全く違う分野のイベントにも参加しようと思っており、そういうところでも知ってもらう人数も把握しながら、レガシーに繋げていきたい。
知事	プロスポーツチームの試合にどれだけ来られた、もしくはそれが増えている、減っているという指標でもいいと思う。 次長から何かあるか。
次長	目標としては、各課室長や部長から説明したとおり。次長として、部の目標達成に向けて部長と一緒に取り組む。 それに加えて、部の中の隙間、庁内の他の部局との隙間、あるいは議会であったり、外部機関の方との隙間とかそういうところを繋ぐことに意識を大きく割いていきたいと考えている。
知事	「健康しが」と言っているのだから。しかも、こんなビッグイベントができる時はない。国スポ・障スポ、彦根城、安土城、こんなビッグイベントができる時に、文化スポーツ部、もしくは滋賀県庁にいることを意気を感じてほしい。部長が言ったように、元気にやるとか、感動を共有するとか、それを波及させるとか、その気構えを皆で持とう。金も人もかけてやってきたのだから、その効果を最大限発信するということがやろう。もちろん、大会本番をしっかりとやるということもそうだが、その後何を残していくのかということも考えてやる。僕が一番こだわってきたのは、平和なくしてスポーツなし、命あつての健康である。しかも、コロナ禍を乗り越えてきたから、それらを輝かせるという。テーマソングも「シャイン」だ。 関連ではツーリズムとの関係や公共交通など。滋賀県は、これだけ公共交通って言っているのだから、バスだけに頼らなくていいと思う。あと健康との兼ね合い。今言ったことは、他部局と関係するところだから、次長があちこち回りながら大いにやることもあると思う。 最近感じるの、見るのは面白い。でも支えるのはもっと面白いという、この感動。多分、びわ湖マラソンをやったらわかると思う。例えば、美術館を見る人を支えている、もしくはそのことを説明するっていうのもそうだと思う。支えることの感動は、滋賀県の今年から来年にかけて、一つのテーマになるのではないかな。それをうまく作ったら、それがまたレガシーにつながると思うし、支える、ともに生きるに繋がる。良いときに、いいメンバーで、仕事ができると思う。